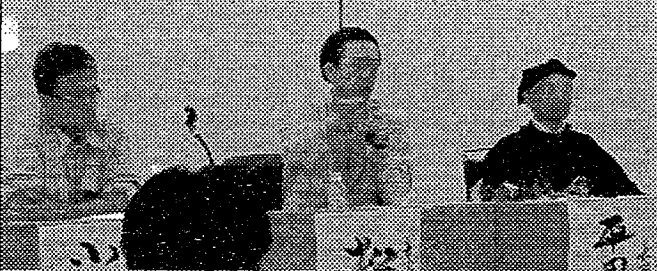
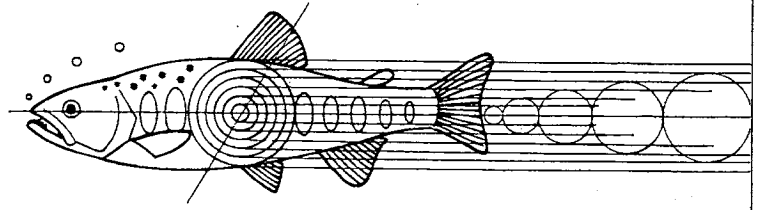


news

長良川市民学習会ニュース



長良川に徳山ダムの水はいらない。



No.9

2010年7月12日

表紙・目次(写真:市民による豊かな海づくり大会より 撮影:Maki)……………P.1
導水路・長良川をめぐる近況報告……………P.2~3

市民による豊かな海づくり大会報告……………P.4~11
校歌に歌われた長良川、事務局より……………P.12

7月26日(月)「長良川河口堰—失われた生態系と回復へのシナリオ
報告とシンポジウム:長良川市民学習会など9団体が共催■会場:ハートフルG大研修室

導水路・長良川をめぐる近況報告

河口堰ゲート開放が市民世論に

みなさまのご支援で「市民による豊かな海づくり大会」は成功しました。お礼を申し上げます。

大会1日目6月5日(土)、長良川国際会議場での講演・シンポジウムには定員を大幅に超える180名の市民が参加。翌日新聞各社はその様子を報道しました。事務局が準備した大会資料は午前中に品切れ。大変ご迷惑をかけました。

午前の向井先生の「長良川の魚たちは今?」と山内先生の「河口堰と長良川」の講演は、海と断絶した長良川がかかえる問題を浮き彫りにしました(P4~7)。また、午後のシンポジウム「豊かな川から豊かな海へ」は、多彩なパネラーの登場で、長良川流域の状況と文化を学び・確認しあうものとなりました(P8、9)。夕方は50名を超えるみなさんが川原に出て、バーベキューを楽しみました。お酒も進み、歌も飛び出し流域の交流を深めることができました。

大会2日目6月6日(日)は長良川に触れ、長良川と遊び、長良川を学ぶイベントの日です。天気は良好。「ラフティング」「水辺観察会」「釣り大会」「まちめぐり」多くの子供の参加もあり参加者は80名を超えました。それぞれのコースで、長良川の素晴らしさ、魅力を体感する取り組みとなりました(P10、11)。

河口堰問題に目をそむけて「清流がつなぐ未来の海づくり」はありえない。今こそ、ゲートの開放を！を合言葉に私たちは流域の9市民団体で「市民による豊かな海づくり大会」実行委員会を今年1月にスタートさせました。そして、ねらい通り、河口堰ゲート開放問題は確実に市民議論になりました。

岐阜市長は5月24日記者会見で「河口堰ゲート試験開放、有効」の姿勢を初めて明らかにしました。ゲート閉鎖で深刻な漁獲量減少に危機感をもった長良川水系の漁協7団体が「海づくり大会」を目前に、民主党に対し「ゲートの試験開放」を求める陳情書を取りまとめるという注目する動きも生まれました。そして「市民による豊かな海づくり大会」の2日後の6月8日、古田岐阜県知事は、私たちの要請書に対する回答ともいえる内容で、ゲート開放に関して「当面は現状のまま定期調査の結果を注視していく」とのコメントを発表

朝日新聞夕刊 2010. 5/29

しました。世論の盛り上がりを見守ることができなくなった結果の定例記者会見でした。

6月12・13日の「全国豊かな海づくり大会」にゲートを開放するという「願い」は実現しませんでした。しかしゲート開放の市民世論は確かなものとなりました。5月29日朝

「運用ルール変更、回数増加を」

「運用ルール変更、回数増加を」

「運用ルール変更、回数増加を」

河口堰「開放」議論再び

長良川、閉鎖15年 経済界・首長前向き

「河口堰「開放」議論再び

長良川、閉鎖15年 経済界・首長前向き



日新聞夕刊が『河口堰「開放」議論再び』、7月9日中日新聞が『「堰も開放」高まる機運』のタイトルで世論の盛り上がり大きく報道しました。

実行委員会は、この機運をさらに広げるため今年10月名古屋市で開催されるCOP10でも河口堰問題をアピールしようとししばらく活動を存続させることで合意しました。当面、長良川下流域生物相調査団の「長良川下流域生物相調査報告書2010-河口堰運用15年後の長良川」発行記念を兼ねた報告・シンポジウム『長良川河口堰-失われた生態系と回復のシナリオ』を7月26日に主催することを決め、その成功に向け取り組みを進めています。

目が離せない導水路をめぐる状況

導水路事業をめぐる状況は厳しいものになっています。すでにNEWS8号でもお知らせしたように事業「凍結」の名のもとで建設を前提にした環境調査費5億円が予算化されるとともに、前原国交大臣は成り行きを「有識者会議」に「お任せ」状態にしています。その「有識者会議」がこの夏に出す予定の中間報告案によると、「関係自治体との検討の場を設ける」「利害関係者からも意見を聞く」等、ダム推進の結論にまっしぐらに進む様相です(今日ダム問題をここまで深刻化させたのは、要らない水を厚顔無恥にも「要る、要る」と言い続けてきた無責任な自治体当局の姿勢です)。民主党政権の「政治主導」の意気込みはどうなったのでしょうか?危ない状況です。

一方「凍結で導水路問題は終息」のムードが市民に広がる中、6月2日岐阜県庁において県議会水資源対策議連主催で「導水路建設促進大会」が開かれ約200人が参加。古田知事も来賓としてあいさつ。木曾川水系三県の関係自治体も参加。導水路撤退を表明した河村市長の名古屋市の担当者も参加したとの報道がありました。

長良川市民学習会は、導水路問題が市民の目から離されないよう、今回の参議院選挙で導水路、河口堰問題について岐阜選挙区の予定候補者5名に対し公開質問状を提出しました。導水路事業に対して、「速やかに本工事着工し、事業を推進すべきである。」と答えたのは渡辺さん(自民)、「今年度予算の執行を凍結し、地元を中心に計画の見直しを行うべきである。」と答えたのは山下さん(民主)、「事業を中止し、事業計画を白紙に戻すべきである。」と答えたのは小見山さん(民主)と鈴木さん(共産)でした。選挙の結果当選したのは、渡辺さんと小見山さんでした。渡辺さんは東濃・可茂地域の水不足解消を理由に導水路の必要性を訴えています。今後「導水路は渇水に有効」論の誤りを伝えていく取り組みが必要です。

また、選挙期間中、中日新聞が岐阜県内有権者に対し「民主党政権が木曾川水系導水路事業を凍結したことについて」アンケートをとった結果、「評価する」が23.1%、「評価しない」が20%、「どちらでもない」が49%で半数近くに達しました。政権の姿勢の「揺れ」と歯切れの悪い「凍結」状態が一般市民に導水路問題を分かりにくくしているようです。

事実を明確に歯切れよく分かりやすく地域から発信する市民運動が、今私たちに求められています。

中日新聞 2010. 6/25

長良川河口堰開放

長良川市民学習会
(代表・粕谷志郎岐阜大教授) は二十四日、木曾川水系連綿導水路事業と長良川河口堰について、参院選岐阜選挙区(改選区)の立候補者五人に出した公開質問状の回答を公表した。

渡辺さん 反対
鈴木さん 賛成
山下さん 試験的
小見山さん 実施を

国が凍結している導水路事業について、自民新人の渡辺さんが「凍結」と回答。一方、民主現職の山下さん、民主現職の山下さん

市民団体の質問状に回答

謝安さんは「計画見直し」、民主新人の小見山さんは「環境とのバランスを考慮し、発展的解決の斡旋を要する」と白紙回答。同学習会は、導水路事業に反対し、河口堰のゲート開放を求めては、渡辺さんが「問題が「国政の重要放すべきではない」として、岐阜選と答えたのに対し、鈴木選挙区に出馬予定した木さんは「開放」、山いた五人に十六日に公下さん、小見山さんは「公開質問状を出して」「試験的に開放」と答えた。

(山本真樹)

(講演) 長良川の魚たちは今？

向井貴彦 (岐阜大学地域科学部)

1. 岐阜県の象徴としての「清流・長良川」

長良川は郡上市の大日ヶ岳に源を発し、岐阜県中央部を流れて伊勢湾へと注ぐ延長 166km におよぶ河川です。典型的な中流域の景観が関市から岐阜市にかけて広がっており、市街地においても「清流」と呼ばれるに相応しい姿を見せると共に、伝統的な鵜飼いなどの文化を育んできました。また、県中央部を流れるために、美濃地方の広い範囲にその流域が広がっています。そのため、県内には宮川(神通川)・石徹白川(九頭竜川)・土岐川(庄内川)・矢作川・揖斐川・木曾川といった水系の河川も流れているものの、それらの多くが他県を流れる割合が多かったり、規模の上で長良川に及ばないために、岐阜県を象徴する「川」といえば、長良川を指すこととなります。そして、「清流」の名を冠して全国に知られることで、さらに愛される存在となっています。

また、長良川は岐阜県を象徴する河川であるとともに、県内の主要部をその流域に含むため、岐阜県に生息する魚種のほとんどが長良川水系に生息しています。日本海側に分布が限定される一部の種や、すでに長良川水系で絶滅したと思われる種を除けば、ほぼ「岐阜県の魚」=「長良川の魚」と言えるでしょう。それでは、岐阜県には何種の魚が分布しているのでしょうか？ 25 編の文献情報を集約し、写真や標本による裏付けの有無、その魚種の生態を考慮して検討した結果、岐阜県には在来種 81 種、国内外来種 9 種、国外外来種 15 種が分布するようです。



2. 魚たちに迫る危機 1：人工的な環境変化

一昨年、私は岐阜県の魚類の信頼性の高いリストを作成して、岐阜県改訂レッドリスト(絶滅のおそれのある野生生物のリスト)の選定作業に参加しました。委員会の魚類部会の中で、在来種すべてについて1種ずつ現状を検討した結果、31種が絶滅のおそれのある種として選ばれました。それらは主に水田周辺の水路やため池に生息する魚と、海と川を回遊する魚、そして汽水魚であり、水環境の人工的な変化によって生息地を奪われてきた魚たちです。

水田周辺は圃場整備が進むことで水路が直線化し、コンクリートで固められ、農業用水の必要ない時期は干上がってしまうことで、魚たちが住めなくなってきました。ダムや河口堰が、河川の生き物に大きな影響を与えることは、多くの方々が御存知でしょう。ダムが作られることで海から河川へ遡上するアユなどの移動が妨げられ、ダム湖で繁殖したプランクトンが下流の生態系も変化させます。川と海を分断する河口堰は、海と川の狭間の汽水域を消滅させることで、汽水域で一生暮らすシラウオやクルマサヨリ、チチブなどの生息場所を無くし、成長の過程で汽水域に依存するスズキやマハゼの子供たちの

育つ場所も奪っています。

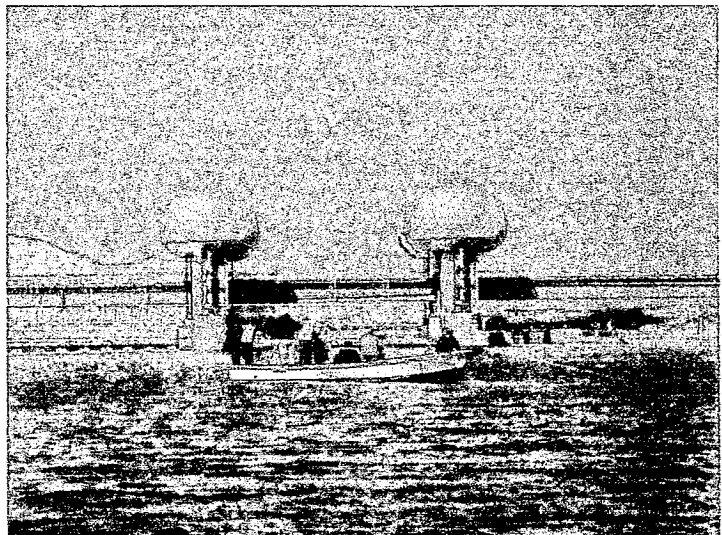
3. 魚たちに迫る危機2：外来種問題

圃場整備やダム・河口堰といった「目に見える」変化だけでなく、外国や日本の他地域から動植物を持ち込むことも大きな問題となっています。特に、ブラックバス（オオクチバス・コクチバス）は、強力な捕食者でありその影響の大きさは他に類を見ません。ため池にブラックバスが侵入して繁殖しはじめると、全長 15 センチ以下の在来魚は全く生息できなくなります。河川ではブラックバスの影響が小さいですが、ウシモツゴやカワバタモロコ、トウカイヨシノボリのように、ため池に生息する希少淡水魚にとっては恐るべき脅威です。

しかし、海外から持ち込まれた外来種だけでなく、日本国内で持ち運ばれた生物も、自然の姿を変えてしまいます。一生を河川や湖沼で過ごす淡水魚の場合、洪水や地形の変化がなければ、別の水系に移動することはできないので、山脈などで隔てられた地方ごとに、数十万年から数百万年間隔離されています。その結果として、「同種」として分類されていても、それぞれの地方ごとに少しずつ違う特徴を持った魚が生息しています。そうした地方ごとの多様性は、安易な魚類の放流をおこなうと失われてしまいます。特に、伊吹-鈴鹿山地を挟んだ岐阜県と滋賀県の間では、さまざまな淡水魚が数十万年から数百万年間隔離されてきました。岐阜県の淡水魚と琵琶湖の淡水魚は、一見すると同じに見える種類でも、遺伝子を比べると全然違うのです。しかし、琵琶湖産アユを岐阜県に放流することで、さまざまな淡水魚がアユに混じって侵入してきました。これまで、ゼゼラ、モツゴ、オイカワ、ヌマチチブ、トウヨシノボリについてミトコンドリア DNA の調査をおこなってきましたが、モツゴはヘラブナやコイ、それ以外は琵琶湖産アユへの混入によって、本来岐阜県にいたものとは違う特徴を持った個体が広がりつつあることがわかりました。

しかし、オイカワ（シラハエ）の場合は、揖斐川・長良川・木曾川の広い範囲で琵琶湖産の侵入が見られるのに対して、アユの放流が少ない土岐川・庄内川では、在来型の個体しか見つかっていません。このことは、「清流」の名の下に大量のアユを放流してきた木曾三川の自然が本来のものとは異なるものへと置き換えられており、汚染が進んでいると考えられてきた庄内川に本来の自然が残っているという、皮肉な事実を表しています。

私たちが求めているのは、見た目は綺麗だけれど、泳いでいる魚は、人が放流したものばかりの「清流」でしょうか？ それとも、何十万年もかけて自然が形作った在来の生き物の暮らす川でしょうか？ 皆で考える必要があります。



(講演) 河口堰と長良川

山内克典 (岐阜大学名誉教授)

はじめに

河口堰運用後、建設省・水資源開発公団(現国土交通省・水資源機構)、日本自然保護協会長良川河口堰事業モニタリング調査グループ、長良川下流域生物相調査団などにより、長良川河口堰のモニタリング調査が行われた。国土交通省・水資源機構のモニタリング調査は大規模なもので、10年間実施された。日本自然保護協会長良川河口堰事業モニタリング調査グループの調査は最初の5年間、長良川下流域生物相調査団の調査は断続的に14年間続けられ、長良川河口堰の運用が開始されてから15年目になる今年、それぞれ最終報告書が作成された。

長良川の自然環境がどのように変化したのか?各モニタリング調査は変化の実態をどうとらえたか?様々な影響予測は正しかったのかどうか?それぞれのモニタリング調査が終了している現在、これらの問題をあらためて検討することは、次のステップに進む上で不可欠と思われる。ここでは、私が実際の調査に携わった「河口堰下流部におけるヘドロ堆積」と「河口堰上流域におけるヨシ原の減少」の問題を検討する。

1) 河口堰下流部におけるヘドロ堆積

影響予測

建設省・水資源開発公団：●上流・下流の底質には現状に比し著しい変化が生ずるものとは考えられない(1968、KST)。●堰下流や伊勢湾の物理環境に大きな影響を与えることはない(1992)。●浮遊有機物は沈降せずに流下する、沈降しても $150 \text{ m}^3/\text{s}$ の出水で掃流される。圧密されても $200 \text{ m}^3/\text{s}$ の出水で掃流される(1992)。

奥田・粕谷(1995)：●河口堰により鉛直循環流が生じ、ヘドロが堆積する。●河底や底層河川水は貧酸素化・無酸素化し、生物の住めない環境になる。

堰運用後の変化とその評価

国土交通省・水資源機構の見解(2006)：●河口堰の設置による流況の安定化による影響もみられた。ただし、出水による変動が大きく、底質悪化が継続することはない。

●堰の運用後、堰付近において粒度組成の細粒化がみられる箇所があり、細粒化のみられる箇所では酸化還元電位が低下し、また強熱減量についても相対的な増加がみられた。しかし、平成11年9月の出水により上記の現象は解消された。●その後、再び前記と同様の現象が認められるようになってきたものの、平成16年10月の出水後の調査では細粒分が減少するとともに、酸化還元電位が上昇した。また強熱減量、全炭素、全窒素等も大幅に減少しており、底質は改善された。●河口堰下流の河床においては、出水に伴い堆積あるいは洗掘が生じ変動している。それらは、箇所や出水ごとにことなる。●長良川は河川であり、出水によって底質が改善される。湖沼においてみられるように経年的に底質悪化が継続することはない。

山内ら(2010)の見解：●河口堰下流の広い範囲に、ヘドロが「経年的」に堆積した。●このヘドロは

大洪水でもほとんど流されなかった。●墨俣流量が 4400 m³/s 以上の大洪水では「ヘドロ」上に砂が堆積したが、中小洪水では砂はほとんど堆積しなかった。●ヘドロ堆積域では、ヤマトシジミは激減し、貧酸素耐性のあるヤマトスピオなどの小型ゴカイ類が生息するようになった。

底泥堆積に関して両者の見解に大きな矛盾はない。国土交通省・水資源機構は限られた地点の調査にのみ基づいて変化を把握しており、堰下流 1 km 強にわたって生じた大規模なヘドロ堆積を把握できなかった。

2) 河口堰上流域におけるヨシ原の減少

影響予測

国土交通省・水資源機構 (1992) ; ●ヨシ原は、浚渫、ブランケット工事、水位の変化で一部消失するが、ヨシ原の造成によって対処する。

粕谷・山内 (1996) : ●ヨシは T.P. 80cm~T.P. 130cm の地盤にのみ生き残る。●ヨシは川岸のところどころに線状にのこるのみ。

河口堰運用後のヨシ原の変化とその評価

国土交通省・水資源機構の見解: ●堰の上流の水中ヨシ群落の一部に退行現象が見られる。堰の上流水域の一部において、生育地盤の低い箇所では生育不良な状況がみられる (2000)。●生育地盤高の下限の変化、地盤の低い生育地での平均密度の変化は、河口堰の供用による堰上流域の水位変動の減少に起因するものであると考えられた (2006)。●ヨシ植栽地のヨシは順調に定着・生育したことから、1997 年度で調査を終了した (2006)。

山内らの見解 (2010) : ●長良川下流域で、河口堰運用後 8 年間で約 90% のヨシ原が死滅した。●国土交通省・水資源機構のヨシ植栽地及びヨシ造成中州はセイタカアワダチソウ、オギ、ヤナギ類などの植物と交代した。●ヨシの生育範囲は T.P. 80~130 cm の地盤に限定された。●ヨシ死滅の原因は、陸上部では他種植物との競争に敗れたこと、常時水没する地盤では「根腐れ」を起こしたことである。●ヨシ原の消滅はプランクトンの増殖を促し堰下流部河床のヘドロ化の原因となった。

国土交通省・水資源機構のモニタリング調査は、各調査地点のヨシ群落の変化を個別的に記録したものの、ヨシ原の全体的な変化について把握しなかった。ヨシ植栽については、調査がわずか 3 年で打ち切れ、その後起きた変化を把握できず、現在は間違った結果・結論に落ち入っている。

おわりに

長良川河口堰が、汽水域を破壊し、河川を湖沼化あるいは人工水路化し、長良川の自然環境を一変させたことは間違いない。さらに奥伊勢湾の海底の環境悪化にも一役買っているのではないかと疑われる。その影響は漁業や観光業をはじめ流域住民の生活にもおよんでいる。おりしも、今年には「第 30 回全国豊かな海づくり大会-ぎふ長良川大会」が岐阜県で、「生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP 10)」が愛知・名古屋でそれぞれ開催される。この機会に、河口堰の影響評価が科学的になされ、長良川の復活について議論が深まることを願う次第である。



シンポジウム「豊かな川から豊かな海へ」

大会1日目午後のシンポジウムは、水源の山から伊勢湾から多彩なパネラーの話でタイトルどおりの内容となりました。参加した市民からは「興味深いパネラーの招請に感服しました。」「上流から伊勢湾へのつながりが大きく語られ視野が広がりよかったです。」等々の感想が寄せられました。

シンポジウムは上流の報告から始まりました。

サラリーマンから林業の現場に転職した**小森胤樹さん** (39才)

国の林業再生のしくみづくりに意気込みは感じられる。財務大臣から総理大臣になった菅さんに頑張ってもらいたいと思っている。しかし、中山間地域に住んで働ける政策になっていない。厳しい中「適正価格でやれ」というのは分からないではないが、一般の公共事業と同じにして低価格ならいいのか？安い労働力で日本語がしゃべれない人も投入されているが、そんなことで良いのだろうか。と語り中山間地域で田舎の人が安心してやっていける林業を訴えました。また、杉、ヒノキ林の現場をスライドで示しながら樹種による違いや手の入れ具合による林相変化の実際を説明され、森林に人の手を入れる大切さと苦勞を訴えられました。

長良川上流郡上市美並町刈安で生まれ育ったパネラーの**松山寛さん** (57才)

豊かな山と川で育った。子供のころは蛇を捕まえては振り回して遊んだり、カケスやモチで小鳥を捕って遊んだ。周りには生き物がいっぱいいた。ところが突然これらが消えてなくなった。ヘリコプターで農薬を撒いたりして、いなくなってしまった。最近では、蛇を見ると「元気かい」と声をかける。子供のころ蛇や小鳥を殺して遊んだことを謝っている。と想いを語りました。また、山のことに触れられ、最初は杉、次にヒノキと植林していった経験や林道づくりの問題も語られ、林道の管理を間違えると雨で川と化し山を崩し土砂となって長良川に流れ込む話もされ山の維持管理の大切さを訴えられました。現在、生き物に申し訳ないと思い自宅の田んぼを開放してビオトープをしている。昔見た風景を残し・作り子どもたちに残したいと抱負を語られました。

関市小瀬出身、鶺鴒姿で登壇された**平田勝高さん** (80才)

お祖父さんが小瀬、長良、犬山の鶺鴒で使われる籠を独占的に納めておられ、それを誇りに思っ育てられました。

鶺鴒は仏教などと一緒に中国から入ってきたという人がいるがそうではない。この私の衣装を見てください。子供たちは「浦島太郎だ！」とすぐに声を出します。そうです。鶺鴒いは日本に昔からあったものに違いありませんと開口一番鶺鴒文化の大切さを訴えられました。鶺鴒が鶺鴒の性格・習性をうまくとらえて行われていることや鶺鴒の鶺鴒の一生・老後についてもユーモアを交えて詳しく話されました。鶺鴒を自分の子のように愛おしく話す平田さんの語り口に参加者は魅了されました。

創業130年を誇る川魚佃煮の老舗「角鯨」を関市で営む若旦那**野田卓志さん** (37才)

「いかだばえ」は冬捕れる白はえを添加物一切使わず昔ながらの製法で炊きあげている。白はえは鮮度が落ちやすく扱いが難しい魚です。魚の数が少なくなったので「いかだばえ」をやる人は減っている。

今の時期は「うるる」です。ヨシノボリという魚です。(スライドで示しながら) こういう「登り落ち漁」という方法で獲ります。昔は、10キロも獲れて、これ以上持って来られても困るようなこともありました。しかし、最近ではめっきり減って1日2〜3キロ。この2、3年は全く獲れず困っている。いつ物

(魚)が入ってくるのか分からず仕事にならない。10年15年先にこの仕事ができるのか心配です。とにかく川に水が無くなった。「登り落ち漁」は水が多くても少なくてもできない漁です。最近雨が降ればすぐ大水になり、石に苔が着かない。魚が棲めないようになってしまった。

河口堰もそうだが、山の開発で川は変わってしまった。子供を取り巻く環境も変わってしまった。今は、川は危ないところといって近づかせない。私は、これからの子どもたちのために川を昔の姿に戻したいと思っている。

羽島市で専業漁師をする**大橋亮一さん**(75才)はこの時期漁で忙しくビデオで参加していただきました。

私らは河口堰に反対しました。補償金がほしかったからではありません。いい長良川をいつまでも残したかったからです。河口堰ができて5・6年ぐらいいまでは良いときもありましたが今はもうさっぱりです。サツキマスは、堰ができる前は1000匹捕れました。今はもう駄目です。今年はまだ100匹も捕れていません。今年、長良川の7つの漁協でゲートを上げてほしいという要望がまとまりました。鮎やサツキマスが上るときと下降するときだけでいいから開けてほしいです。

濁水のために導水路の水を流すというのはバカバカしい話です。長良川で濁水で流れが止まったことはありません。だいたい川には濁水というものが無ければあかんのです。濁水は魚のためにも良いのです。長良川に他の川の水は要らん。欲しいと言っとる人のところへ直接持ってってください。

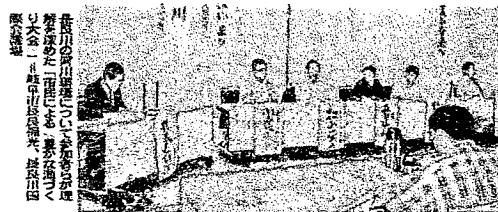
元気な声でインタビューに応じていただきました。

最後に、流域の視野から伊勢・三河湾ネットワーク共同代表の**高山進さん**(61才)が話されました。

伊勢湾と三河湾はつながっている。両方を視野に入れたネットワークづくりをしている。流域の山・川・里・海をつなげた自然資源の系としてとらえ、現場で苦勞している市民活動を支えるものにしたい。また、今年開催されるCOP10については、昨年1月市民サイドからネットワークを立ち上げ活動を進めている。

現在「伊勢湾再生計画」があるが、行政だけで進められている。3年目で見直しが必要だが「市民参加」を受け入れようとしない。辻さん(伊勢・三河湾ネットワーク共同代表)は、「みんなが本気で集まっているんな議論を率直にかわし、その結果が生かされるしくみが日本にはない。そのことを考えないと、いくら提案やきれいな文書ができて現場は少しも良くならない、よくなる見通しが無い。残念だ。」と語っている。わが国では行政同士が同床異夢でしかも主体性が感じられない。計画が上意下達型で縦割りなのが日本の現状だ。ヨーロッパの先進例をみると国土計画が市町村自立の政策を尊重するボトムアップ型となっている。と今後の方向を示されました。

岐阜新聞 2010.6/6



市民グループ、独自の海づくり大会 シンポ

河口堰による環境変化訴え 岐阜市

長良川河口堰の建設による環境変化が懸念され、市民グループが独自の海づくり大会を開催し、環境変化を訴えた。長良川河口堰の建設による環境変化が懸念され、市民グループが独自の海づくり大会を開催し、環境変化を訴えた。長良川河口堰の建設による環境変化が懸念され、市民グループが独自の海づくり大会を開催し、環境変化を訴えた。

豊かな山河取り戻せ

羽島市は山を削り、河川下流部の環境を悪くし、水質が低下している。市民グループが独自の海づくり大会を開催し、環境変化を訴えた。長良川河口堰の建設による環境変化が懸念され、市民グループが独自の海づくり大会を開催し、環境変化を訴えた。

新聞各紙の報道(6/6)

- 水環境を考える討論(中日)
- 豊かな海へ議論(毎日)
- 長良川河口堰「開放を」(読売)
- 河口堰試験開放アピール採択(朝日)

大会2日目 6月6日(日) 長良川での楽しいイベント

- 1) ラフティング 35名参加
- 2) 魚釣り 14名参加
- 3) 水辺観察会 28名参加
- 4) まちめぐり 7名参加
- 5) 本部 2名

合計86名



どれも「良かった、楽しかった」と参加者から好評でした。

1) ラフティング

「長良川河口堰建設に反対する会」スタッフの協力で千鳥橋から長良橋まで、6艇でじっくり長良川を味わいながら下りました。

2) 魚釣り

捕れた魚：カジカ、シラハエ、ウグイ

「自然を考える釣り人の会」傍島さんのコメント

お疲れ様でした。釣りは、ポイント選びで釣果が左右されます。

いつも頭をヒネリながら釣っているアマゴより、溪流釣りでは雑魚扱いの当たり前に釣れてしまう魚を、いざ釣らせようとするところなのに難しいものなのか、少々、複雑な思いをしております。

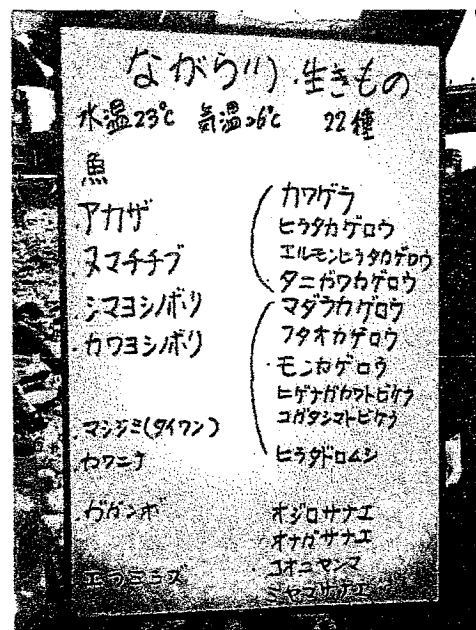
今日、女の子が釣ったカジカですが、地方名が色々あり、揖斐、郡上辺りでは“チチカブ”、“カブ”、福井方面では“チチブ”と呼び、他のカジカとは別の扱い（美味しいので）をする、昔はどこにでも居た魚です。今は、上流地域でしか見かけなくなった魚です。あの付近（長良橋）で釣れたのは珍しいと思います。偶然に大型が釣れるとアユカケと間違える人もいます。

3) 水辺観察会

「名古屋市水辺研究会」の指導でたくさんの生き物を観察できました。以下、近藤実行委員のメモから
2010年6月6日(日) 午前 水温23℃、気温26℃

見つかった生き物 22種 (【 】内ローマ数字は※印参照)

アカザ	カワゲラ【I】
ヌマチチブ	ヒラタカゲロウ【I】
シマヨシノボリ	エルモンヒラタカゲロウ
カワヨシノボリ	タニガワカゲロウ
	マダラカゲロウ
マシジミ(タイワン?)	フタオカゲロウ
カワニナ【II】	モンカゲロウ
	ヒゲナガカワトビゲラ
ガガンボ【I】	コガタシマトビゲラ【II】
	(以上 トビゲラの仲間)
エラミミズ【IV】	ヒラタドROMシ【II】
カワゲラ【I】	オジロサナエ
	オナガザナエ
植物	コオニヤンマ【II】
フサモの仲間	ミヤマサナエ
ヤナギモ	
オオカナダモ(外来種)	



※ 国交省と環境省で作成した水質の指標生物30種

http://www.mlit.go.jp/river/press_blog/past_press/press/9907_12/990714c.html

きれいな水(水質階級 I) / すこしきたない水(水質階級 II)

きたない水(水質階級 III) / たいへんきたない水(水質階級 IV)

★アカザ ナマズ目 アカザ科

環境省レッドデータブック 絶滅危惧 II 類 (VU)

http://www.biodic.go.jp/rdb_fts/2000/71-045.html

★カワニナ 軟体動物門腹足綱カワニナ科の巻き貝。ホタルの餌となる

★ヌマチチブ 後藤宮子さん作成のリストの「(長良川での生息数ベスト10)」の種=長良川を代表する種の一つ

★シマヨシノボリ 石の下に産卵し、孵化するまで雄が守る。海と行き来する。

★カワヨシノボリ 一生を川で過ごす

いるはずなのに獲れなかったもの。モクズガニ 海と行き来し、冬に海で産卵する。今は川を遡上しているはず。

4) まちめぐり

岐阜大学の富樫先生の案内で、長良川の歴史、川原町のまちづくりの現場を歩いてめぐりました。

川原町の喫茶店で休憩してじっくり長良川のまちを楽しみ魅力を再発見しました。

●おしらせ 市民による「豊かな海づくり大会」実行委員会参加グループの行事です。ご参加ください。

■ 7月17日(土)～18日(日) COP10・100日前イベント「生命流域シンポジウム」in 王滝村
名古屋の水の源を考えます。名古屋市民御岳休暇村 17日午前8:30 金山駅集合バスで
問合せ: 090-4117-7023 (石原)

■ 8月8日(日) 10:00～15:00 「海の健康診断」 藤前活動センター(港区南陽町藤前)
連絡先: 藤前干潟を守る会 080-5157-2002 /info@fujimae.org

■ 8月21日(土)～22日(日) 「恒例徳山村キャンプ」 21日13時にJR大垣駅北口集合
申し込み・問合せ: 徳山ダム建設中止を求める会 0584-78-4119 (近藤) /k-yuriko@octn.jp

■ 8月23日(月) 13:30～ 導水路はいらない!愛知の会「住民訴訟・第6回裁判」
名古屋地裁 問合せ: 052-811-8069

■ 9月4日(土)～5日(日) 長良川で遊びつくそう「長良川DAY2010」
郡上市美並町 ふくべの里粥川バンガロー村
問合せ: 長良川DAY実行委員会 058-265-0417 (堀) /nagarask@gmail.com

■ 10月11日(月)～15(金) 「いまじんウォーク」徳山と設楽からCOP10会場まで歩きます
問合せ: 実行委員会 052-834-0553 /info@imagine-walk.com HP:<http://imagine-walk.com/>

●本の紹介 長良川とともに生きる人たちの話です。長良川がさらに好きになります。

わたしたちの子どもの頃の金華の町

この本の編集者の金華一二三会は、昭和12年3月に岐阜市金華尋常高等小学校を卒業した同窓生の会である。昭和初期のふるさとが、時代の流れの中に消え去っていく前に、記憶に残しているものを記録として後世に残したい、と各自が手分けして書いたものを編纂したのが本書である。当時の町並みや人々の生活、子どもたちの学校生活や遊び、お祭りなどが実に生き生きと描写されている。当時の町並みの地図や写真、手書きの絵も多く、興味深い楽しい読み物になっている。資料としても大変貴重なものであろう。この本の発行には、岐阜大学の地域科学部の富樫先生たちの協力も大きかったとのこと。

問合せ: 岐阜大学地域科学部 富樫・山崎 058-293-3314 / ktogashi@gifu-u-ac.jp

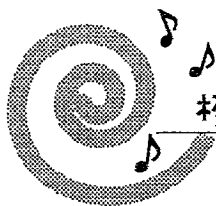
長良川漁師口伝—僕んたア、長良川の漁師に生まれてよかったなあ

大橋亮一・大橋修 語り 磯貝政司 聞き書き・写真

川をテーマに写真を撮っていた磯貝さんが、磁石に引き寄せられるように大橋兄弟のもとに通い18年。その間に聞き取った、生い立ちから長良川の今昔、漁法、漁師の生活などをまとめたのが本書である。専業川漁師としての生活の歴史は、長良川の盛衰と重なり、時代の大きな流れを読む者に語りかける。

「長良川自体は、もう死んでまっとるわ。河口堰ができたから云々やなくて、ほんとに今は死んでまっとるもん。そんなでもさあ、こんないい川は残しておいてやらんといかん。ほんと惜しい。」「悪うなつたと言っても、長良川は長良川や。これより悪うならんように、少しでもよくならんかなあと思つてる。」この言葉は二人の人生を支えた長良川への深い思いであろう。(万)

発行: 人間社 2600円 問合せ: 052-731-2122



校歌に歌われた長良川 ⑨

岐阜市立岐阜小学校校歌

作詞・作曲 藤掛廣幸

一 明るい朝日に 輝く緑の山並
歴史を築く 希望の陽が昇る
おはよう！金華山 やさしく 強く たくましく
おはよう！負けない 強い心で
あしたに向かつて 心に望みをもって
夢を目ざして 羽ばたこう

二 自分の力で 何でもやってみようよ
川をさかのぼる 若鮎のように

こんにちは！長良川 今日も元気いっぱい
こんにちは！みんなで 力合わせて
一人一人に 素晴らしい笑顔が生まれるように
自分の花 咲かせよう

三 青空見上げて 世界のことを思おう
すべての国へと 続いているから
ありがとう！友達 みんな手をつなごうよ
ありがとう！この地球 生命（いのち）の星
幸せに向かつて 新しい風が吹く
岐阜 岐阜小学校

金華 京町小学校が統合して岐阜小学校が誕生して2年。長良川沿いの旧金華小学校の跡地にモダンな新校舎が完成しました。授業には、校区にある店や公園や建物を見て歩く「町探検」の時間があります。この新しくできた校歌は、この先何十年と子供達に歌い継がれ、新たな歴史を作っていくことでしょう。

（曲は藤掛さんのH・Pで聞くことができます。）

[[[報告とシンポジウム]]]

1990年から20年間にわたり、河口堰の影響を調査してきた「長良川下流域生物相調査団」が、解散を前に調査報告書を発行しました。その報告会を兼ねた学習会です。是非ご参加ください。

日時：7月26日（月）6:30pm～8:30pm

会場：ハートフルG 大研修室（R岐阜駅2階・東奥）

「長良川河口堰—失われた生態系と回復へのシナリオ」

- 1) 長良川下流域生物相調査報告書より 「河口堰により長良川はどのように変化したか」 千葉克彦（長良川下流域生物相調査団員）
- 2) シンポジウム 「河口堰開放に向けて」
在問正史（長良川河口堰建設差止訴訟・弁護士） 塩害は起るのか？
千藤克彦、山内克典（長良川下流域生物相調査団）

長良川はよみがえるか？

コーディネーター：粕谷志郎

事務局より

稚鮎調査、ヘドロ調査、鮎の遡上観察会などのプレイベントからはじまった、市民による「豊かな海づくり大会」は多くの皆さんの参加、協力で無事終了しました。一連の取り組みから、私たちは長良川が置かれている厳しい状況をより具体的に知りました。しかし同時に、この川の流域で、自然の恵みを生かして地域社会を再生しようとする努力している多くの人たちに出会うこともできました。水辺に入り調査をしてみても長良川の豊かさ、川遊びの楽しさも再認識しました。希望をもって、力を合わせていきましょう。校歌に歌われているように。

発行：長良川市民学習会（「長良川に徳山ダムの水はいらない」市民学習会実行委員会）

代表：粕谷志郎／岐阜大学教授

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298 〒500-8211 岐阜市日野東7-11-1

<http://dousui.org/>（最新情報や資料などが揃っています。ぜひご覧ください。）

●私たちの運動はみなさんのカンパで成り立っています。賛同してくださる方はぜひカンパをお願いします。

郵便局口座番号：00840-3-158403 口座名称：長良川市民学習会